

風景は記憶する

記憶とは何か？ この問いが、《BEACON》の出発点にあった。そして作品制作を通してこの問いを追求するために手がかりにしてきたのが、「風景」である。「記憶」と「風景」。このふたつは互いに密接に結びついていることが、制作の回を重ねる毎にはつきりしてきたのではないか。私はそう感じている。

「風景」といっても、《BEACON》が扱ってきたのは、いわゆる名所旧跡の絶景、「絵のよう」な展望、といったものではない。つまり、そこから即座に何らかの意味が読み取れるような画像ではないのである。もっと日常的な、なんでもない景色である。誰もが学校や職場に通う道すがらに、あるいは旅の途上でたまたま目にするような風景、ことさら「風景」として意識しないようなイメージである。

そうしたイメージを《BEACON》というシステムを使って三六〇度に展開し、そこに複数の時間を重ね合わせたりすることによって、見慣れた景色にあらためて注意を向けるような作品を制作してきた。いや、「注意を向ける」というよりは、むしろそれをぼうっと眺めている経験を作り出したかった、と言う方が正確かもしれない。実際これまでの展示でも、だいたい二十分でひと巡りする映像を最後まで見終わった後も、展示室に留まって何度も繰り返し見ていた人が、少なからずいた。そうした作品体験こそ、まさしく《BEACON》の意図したところではないかと、私は感じたのである。

なぜ、このような作品制作を続けてきたのだろうか？ それは、風景というものにはそもそも、深い謎が潜んでいるからだと思ふ。そうした謎の中には、「解ける」謎もある。つまりそこがどこであり、何が映っており、その背後にどんな物語があるのか、といった謎は、解くことができる。けれども、それで終わりではない。とりわけ

見慣れた日常的風景の中には、たとえそうした謎が解かれ、自分が何を見ているのか分かった後も、いぜんとして消え去ることのない、もうひとつの謎、解けない謎が残っているのである。

この謎こそ、《BEACON》が主題としてきた、風景に蓄積した「記憶」にほかならない。

デジタル技術の支配する現在では、私たちは自分が経験する記憶をも、コンピュータのモデルに基づいて考えがちである。コンピュータのメモリに格納されている情報なら、呼び出せば即座に、いつも同じ形で現れる。けれど、私たちのところに堆積している記憶はどうだろうか？ 誰もが経験するように、それを呼び出すのは必ずしも迅速でも容易でもないし、またいつも同じ形で現れるとも限らないのである。

私たちの記憶は、コンピュータのメモリ上にある情報のようにではなく、むしろ「風景」のような姿で、積み重なっているのではないだろうか？ 風景は、何百万年という地質学的時間から、何世紀あるいは何十年という歴史的時間に至るまで、様々に異なった時間スケールで生じた出来事が、以前の痕跡を多少とも残したまま、何層にも積み重なって出来上がったイメージである。人間の記憶もまた、そのように積み重なって出来ているのではないのだろうか？

……こうしたことを、これまでの《BEACON》制作の実践を通して、ずっと考えてきた。

さて《BEACON 2020》制作に当たり、私たちはまず、展示場所が京都文化博物館であることから、とにかく京都の風景を撮ることに決めた。けれども多くの人々にとって「京都の風景」とは、悠久の歴史や伝統がそこに書き込まれたものであり、いわゆる「京都らしさ」のような先入観なしに見ることは困難である。私たちは、そうではない「もうひとつの京都」を撮ろうと考えた。だがそれを、どこに求めたらいいだろうか？

そこで五人の中で唯一京都に生まれ育った私自身の経験、とりわけ子供の頃の経験を手がかりとして、撮影場所を決めてゆこうということになった。したがってこの《BEACON 2020》の映像内容は、結果として私の幼少時の人生経験とかなりオーバーラップするものとなった。そのために、作品解説をしながら同時に自分史を語るような記述になってしまうが、その点はどうかご容赦いただきたい。



私は昭和三二(1956)年、京都府宇治市伊勢田町で生まれた。関西電力に勤務していた父が、昭和三六(1961)年九月のいわゆる「第二室戸台風」による被害の復旧作業中事故で亡くなり、母は幼い私と妹を連れて、自分の両親が住む京都市伏見区深草に移り住んだ。京阪電車「藤森」駅から琵琶湖疎水に沿って少し南に下った場所である。私はそこで五歳から二二歳までを過ごした。その後は東山区福稲(琵琶湖疎水の東側の、東福寺と鳥羽街道の間)に住んでいた。

母の両親、つまり私の祖父母は昭和の始め、京都市上京区で間借りをしていたが、昭和五(1930)年に私の母とその妹(卵性双生児)が生まれたのを機に、京都市に編入されたばかりの深草(昭和五年までは京都府紀伊郡深草村だった)に転居した。私の母はそこで育ち、少女時代を過ごし、十五歳で終戦を迎え、二四歳の時に宇治に嫁いだわけである。戦争末期には、双子の妹を栄養失調のために失うという悲痛な経験をした。

かつての深草は都市近郊ののんびりした農村だったが、二十世紀に入ると帝国陸軍第十六師団の司令部が置かれ、二万人に及ぶ軍人が滞在する町として発展していった。また、伏見区と接する宇治には、日清戦争の後、大規模な火薬製造所が作られ、一時は四千七百人もの従業員が働いていたこともある。太平洋戦争後は米軍に接收され、現在はその一部が自衛隊宇治駐屯地となっている。

言ってみれば私は、人生の最初の二十年余りを、京都とその近郊の、戦争の記憶が蓄積する風景に囲まれて過ごした、ということになる。けれども子供の頃は、そうしたことはほとんど知らないまま育った。母からは時おり断片的な思い出を聴くことがあったが、大人たちは戦争に関わる宇治や深草の歴史について、あまり子供に語ることながなかったからである。いつも通る道が「グンドー」や「シダンカイドー」であり、遊び場が「レンページョー」だったが、それらが「軍道」「師団街道」「練兵場」であることを意識したのは、かなり後になってからだった。その背景にある歴史を知った時、それまでの自分がまるで一種の記憶喪失に陥っていたかのように感じたのを思い出す。

《BEACON》の映像内容について、これまで具体的に解説したことは一度もない。けれども今回の《BEACON 2020》に関しては、右に述べたような成立事情であるので、自分自身の回想と行き来しながら説明してみたいと思う。

《BEACON 2020》を自分史と重ねる

映像はまず、それが設置されている京都文化博物館の展示室から始まる。

博物館の中で私たちが出会う「歴史」とは、とりあえずはガラスケースの中に置かれた「資料」である。それらはすでに、多かれ少なかれ専門家によって分析され、解釈されたデータとして存在している。私たちの多くは、資料に直に触れることはできない。博物館のガラスケースは、歴史を「知識」「教養」として、つまり私たちが生きる生の世界とは切り離された情報として、経験させる。もっとも切り離されているからこそ、私たちは過去に対して落ち着いた眼差しを向けることができるのだが……。

一方、外に出るやいなや、私たちは生の世界に直面する。たとえばJR京都駅八条口付近の雑踏。観光客の爆発的な増加に対応して開発が進むバス停留場や八条通、東九条地域の風景。東海道新幹線が開通したのは昭和三九(1964)年、現在の巨大な京都駅ビルが完成したのは平成九(1997)年なのだが、ごく最近まで京都駅の南側には、今のような賑わいは見られなかった。新幹線から降り立った人々の多くはそそくさとタクシーやバスで目的地へと去っていったものである。

昭和五五(1980)年から七年間、私は東山区福稲に住んでいた。京都駅に行く時は歩いて、九条通の南に沿った東山橋を渡り、東九条を抜けて二十分弱の道のりを歩いていた。ちなみにこの東山橋は、井筒和幸の映画『パッチギ』(2005)で、沢尻エリカの演じる朝鮮人の少女に恋した主人公が、傷心からギターを叩き壊した場所である。《BEACON 2014 THE MIX》ではこの橋の上でも撮影を行った。それはともかく、東九条を通って京都駅の南側に至る風景は、私にはきわめて馴染み深いので、今そこを歩くと、どこか外国の街にいるような気がする。

外国人観光客がカメラに気づいてウィンクし、ピースサインを見せる。そんな現在の京都駅八条口の平和な日常風景の中に突然、戦車の映像がオーバーラップして来る。そこから場面は、宇治の自衛隊駐屯地へと移ってゆく。「火気厳禁」と大きく書かれた厳重なコンクリートの構造物は、明らかにかつての火薬製造所と関係のある建物と思わ



れるが、現在はほとんど使用されていないらしく、自衛隊の方でもはつきりしたことは分からないと言う。フェンスのすぐ外には民家があり、茶畑が広がり、真夏の曇空の下に京大宇治キャンパスが遠望される。このキャンパスも旧火薬製造所の敷地の一部である。

陸上自衛隊宇治駐屯地の正門は、京阪電車宇治線の黄檗おうぼく駅から歩いて一分足らずの場所であり、事前に申し込めば構内の見学もできる。空襲を受けなかったために、ここには帝国陸軍時代の古い木造建築や煉瓦造りの建物が多く残されており、よく手入れされて現在も使用され続けている。入口近くに円形の池のような掘り込みが、映像中にもわずかに見えるが、対空高射砲が設置されていた跡ではないかということだった。注意深く地面を見てゆくと、弾薬等を輸送したであろうトロッコの線路跡が残っているところもある。

宇治といえば一般には、古くは平安貴族の別荘地、平等院鳳凰堂や『源氏物語』の「宇治十帖」、そして茶どころとして有名であるが、近代の歴史においては、明治五（一八七二）年に黄檗山萬福寺近くに置かれた火薬貯蔵庫を皮切りに、明治二七（一八九四）年には「大阪陸軍砲兵工廠宇治火薬製造所」が作られ、敗戦までずっと戦争と切り離すことのできない地域であった。けれども私自身、そこに生まれすぐ近くに育っていながら、つまり近代史の痕跡を含む風景の「記憶」に取り囲まれていながら、ほとんど何も見ていなかったのだと思う。

映像はさらに京阪電車「藤森」駅から琵琶湖疎水沿いの道を少し北に進んだ場所にかかっている「キトロ橋」と移動する。京都アニメーションの作品『たまこまーけっと』に登場することから今は「アニメ聖地」のひとつとなっているらしい小さな石橋だが、この橋そのものは私が藤森に住んでいた五十年前と、ほとんど変わっていない。それに比べ、周囲の景色は一変した。京阪電車の向こう側、今はマンションや量販店が立っている辺りから、かつては広大な「練兵場」が広がっていたのである。

映像はそこから再び自衛隊駐屯地内へと移行し、煉瓦造りの建物や倉庫、道路を横切るパイプラインといった風景を経て、深草にある聖母女学院本館が現れてくる。聖母女学院というのは、大正十年にフランスから来日した修道女たちによって開かれたカトリックの学校で、最初は大阪の玉造に創設され、昭和二四（一九四九）年に京都市伏見区のこの地に姉妹校が設置された。私はその東に接する、京都市立深草中学校に通っていた。赤煉瓦の壮麗

な建築物を毎日のように眺めては、やっぱりフランスのキリスト教の学校は校舎からして違うなあと、呑気に感心していた。

だがこの建物こそ、そもそも明治四一（一九〇八）年、帝国陸軍第十六師団の司令部として建造されたものだったのである。戦時中は防空のために真っ黒に塗られており、戦後聖母女学院に払い下げられた後に、学院の方々が自力で磨いて、現在のような煉瓦の外観が復活したと聞いた。こども、予約すれば内部も見学させてもらうことができる。

陸軍第十六師団は、昭和十二（一九三七）年七月に日中戦争が勃発すると華北戦線に投入され、同年十一月には上海に、そして南京攻略戦に参戦することになる。ちょうどその頃の事情を調べていた2019年の春、私は思いがけず南京師範大学から招待を受け、七月にそこで特別講義を行うことになった。中国には何度か行っていたが、南京を訪れたのは初めてであった。講義の中で、制作中の『BEACON 2020』の構想にも触れたところ、聴講していた大学院生を通して、同大学の林敏潔教授と知り合うことができた。そして彼女の案内で大学院生たちと一緒に南京大虐殺記念館を訪れ、館長の張建軍氏チンケンジュンともお話し、貴重な資料もいただくことができたのである。これは本当に、不思議な偶然としか言いようがない。

また映像には登場しないが、私の母校である深草中学校も戦争と無縁ではなく、騎兵第二十連隊が置かれていた場所であった。このことは校内に石碑があり教えられてもいたが、それよりも当時の生徒たちにとって戦争の歴史を感じるきっかけは、「深中七不思議」と呼ばれていた、よくある学校の怪談であった。その七不思議のひとつに、クラブ活動等で遅くなり薄暗くなった廊下を歩いていると、どこからともなく馬の嘶ぎや蹄の音が聴こえる、という話があった。騎兵連隊の厩舎があったからである。数人で廊下を歩いていて誰かが「あつ、聞こえたー」と言うや、ギョーッと叫んで校門の方に向かって逃げたのを憶えている。

次に見えてくるのは京阪「藤森」駅改札から南に出た、「極楽橋」の西の袂から眺めた風景である。私にとってここは深草小学校、深草中学校への通学路だった。中学校の東に位置する「十二帝陵」（南北朝時代の北朝十二帝を祀った陵墓）へと導く、古い石標が残っている。東には直達橋すじかたばし通、北には名神高速道路が見える。疎水に沿って南の方には、子供の頃住んでいた家のすぐ南を走る「第二軍道」の橋が眺められる。



名神高速道路は、東海道新幹線開通の前年である昭和三八（一九六三）年に、栗東・尼崎間が開通した。住宅街を貫通し、深草中学校の真横を走る幹線道路である。騒音や排気ガスに不安を感じていた人々もいたはずだと思いが、それは戦後の経済発展を象徴する日本初の高速道路という肯定的イメージによって、圧倒されてしまった。その時から約半世紀を遡る明治四〇年代前半、陸軍第十六師団の設置が決まって、農地が買収され、軍用車両の通れる頑丈な道路が整備されていく風景を、深草の人々はどんな気持ちで眺めていただろうか……。

中学時代の回想をもうひとつ。二年生の時、理科室の隅に使われなくなった暗室があるのを見つけて、使わせてもらえることになった。そこで写真の現像焼付けに夢中になっていたら、理科の教員が、写真部を作りたいなら自分が顧問になってやると言ってくれたので、数人で写真部を始めることにした。だがぼく以外の部員は暗室作業より鉄道写真を撮ることに興味があり、その影響でぼくもよく撮影に付き合った。ちょうど、国鉄から蒸気機関車が消えてゆく時代だった。よく撮影に訪れたのが、現在は京都鉄道博物館となっている梅小路機関車庫である。

映像では、鉄道博物館の風景にも戦車や高射砲のイメージがオーバーラップしてくる。鉄道の発展もまた近代の産業化や戦争の歴史と切り離せないが、この場所は別な意味でも、太平洋戦争と深い関わりがある。戦争末期、京都は大阪や東京のような大空襲を受けなかったが、それは京都の文化財を守るためにアメリカが攻撃を控えたからだという話を、子供の頃、家族からも教師からも聞かされていた。しかしそれが真実でないことが、一九九〇年代に当時の米軍の機密文書が公開されはじめて、客観的に明らかになった。空襲が少なかったのは、京都が広島と並んで原爆投下の第一目標だったからであり、原爆の威力を正確に測定するために通常の爆撃を控えたからだったのである。そしてその投下目標地点が、この梅小路機関車庫であった。

はじめてこの事実を知った時、憤りや戦慄を覚えたと同時に、自分が今見ている風景が突然現実性を失っていくような、奇妙な感覚を経験した。もしも京都への原爆投下が行われていたら、爆心地から数キロしか離れていない深草に住んでいた母たちはおそらく生きてはおらず、したがって自分も産まれることはなかっただろう。漫画やSFにおける空想上のテーマであった「並行世界」が、眼前の風景を見るリアルな感覚として迫ってきた。

この経験も、『BEACON』のテーマである「風景の記憶」という考えに、ある重要な意味を与えているのではないかと考える。

映像はさらに、観月橋の北西のたもと、宇治川北岸の景色へと移行する。西には近鉄電車の鉄橋が見える。子供の頃、春になると毎年この土手に、大きな袋を持って家族でツクシを採りにきたことを思い出す。不思議なことに、ツクシは最初まったく見えないのに、ひとつふたつと見つけ目が慣れてくると、次々と見つかる。袋を一杯にして家に持って帰り、新聞紙の上で爪の間を真っ黒にしてツクシのハカマを取り、鍋に湯を沸かしアクを抜いて、和え物や煮付けにした。それは昭和四〇年頃で、もう食料に困窮する時代ではなかったが、母子家庭で豊かではなかったのと、終戦直後の習慣が残っていたためだと思う。

そのツクシ採りの時、母が東の方角を指差して「あそこが指月寮しげつりょうやった」と言った。観月橋の向こうに見える、月見館という料亭旅館である。昭和二二（一九四七）年、この旅館の一部を京都市が借り受け、戦災や引揚げ、生活苦から孤児となった子供達を収容する施設が作られた。それが指月寮である。母はその頃十六歳で、まだ女学校に通っていたが、前年の妹の死から早く立ち直れるようにと、特別にこの施設で働くことが許可された。物資も不足していたが、大変な人手不足でもあった。その時の経験を、このツクシ採りの時に聴かされたことがある。

ある日、母が子供達の食事の支度の当番として、長机に食器を並べている時だった。ふだんは大人しく行儀のいい寮生の女の子が、そおと部屋に入ってきて、母がそこにいるのに気づかず、長机の端においてあるお櫃のなかから、飯を手づかみで口一杯に押し込んだかと思うと、逃げるように駆け出していった。そういうことがあればもちろん注意することになっていたが、それを見た母はただ涙がポロポロこぼれ、その場から動くことができなかったという。人間、お腹へって食べもんがないのがいちばん情けない、と母はよく言っていた。食料事情が少しづつよくなり、タマゴが毎朝の食卓に上るようになった時、毎日タマゴが一個食べられるんやったら、この先どんな辛いことがあってもガマンできると思った、とも……。

観月橋付近の団地の風景を経て、映像は再び、博物館の展示室に帰ってくる。



風景は抵抗する

人は、一方ではすべてを記録したいと望み、他方では過去の記憶を抹消しようとする衝動に捉われている。アメリカ合衆国は、敵国の文化を守るなど思いもよらない残虐な戦略を立てていたが、その反面、軍事機密文書を保管し、半世紀後にはそれを公開した。そのおかげで京都への原爆投下計画の詳細も明らかになったわけである。一方、旧日本軍は敗戦直後、戦犯が特定されるのを恐れて大量の機密文書を焼却したために、戦争に関わる歴史の重要部分が不明となり、いわば日本近代史の一部が、ある種の記憶喪失に陥った。記録の廃棄による証拠隠滅への衝動、いわば時間の連続性を放棄し、歴史的な認知症に逃げ込もうとする愚行——それは、現在も続いているように思える。

だが、風景はそれに抵抗する。風景とはひとつの、沈黙する記憶装置なのであり、いかに誰かが自分の利害のために過去を操作し隠蔽しようとも、私たちがすべてが共有すべき記憶を、じっと保持し続けている。なぜなら風景の中には、人が過去を操作したり隠蔽したりした行為の痕跡もまた、積み重なってゆくからである。一方私は、子供の頃に見ていた風景がなぜそのような姿をしていたのか、その背景にある歴史を知った今もなお、その謎が解けたという気がしていない。風景は、抵抗する。なんでもない日常の、平和な景色であるのに、そこにある記憶の蓄積に対して、落ち着いた眼差しを向けることができないのだ。できるのはただ、それを茫然と見つめていることだけなのである。



参考資料

【一般図書】

- 池田一郎・鈴木哲也『新装版 京都の戦争遺跡をめぐる』(つむぎ出版、1995年)
吉田守男『京都に原爆を投下せよ——ウォーナー伝説の真実』(角川書店、1995年)
西川祐子『古都の占領——生活史からみる京都1945-1952』(平凡社、2017年)
中西宏次『戦争のなかの京都』(岩波書店、2009年)
藤井非三四『帝国陸軍師団変遷史』(国書刊行会、2018年)
笠原十九司『南京事件』(岩波新書、1997年)
秦郁彦『南京事件——「虐殺」の構造』(増補版)(中公新書、2007年)
吉田裕『日本軍兵士——アジア・太平洋戦争の現実』(中央公論新社、2017年)
二至村菁『米軍医が見た占領下京都の600日』(藤原書店、2015年)
大内照雄『米軍基地下の京都1945-1958年』(文理閣、2017年)

【伏見中央図書館】

- 『指月寮半世紀史——子どもの幸せを願って』(京都市児童福祉センター、1995年)
『老人が子等に語る 伏見風土記』(伏見区老人クラブ連合会、1988年)
『老人が子等に語る 伏見風土記第二集』(伏見区老人クラブ連合会、1997年)
『子等につたえる伏見風土記総集』(伏見区老人クラブ連合会、2001年)

【南京大虐殺記念館の資料】

- 『人類の記憶——南京大虐殺の実証』(人民出版社、2017年)

【その他】

- 『朝顔の話』(祖父永井淳一が自費出版した随筆集、1962年)

